

句と湊とは同じようなフォームをしている

湊圭伍『そら耳のつづきを』読む

平居 謙



1

湊圭伍の句という時、僕が最初に出会っているのは湊圭史の名前で出された詩集『硝子の眼／布の皮膚』（2004年 草原詩社）の中でのことだったろう。その詩集の中には「恋愛小句集」という題のついた20句が置かれている。もっともこれは「川柳」ではなく「俳句」である。だが問題は俳句か川柳か、ということではなく、詩集の中に極めてフツ一の顔をして句が20も並んでいるということである。

俳句や短歌の書き手たちも自分たちの作品を「詩」と呼ぶことがある。頭では理解しながらもどこか違和感を覚える。けれど詩を書く湊圭史が俳句を載せると言った時、僕はなんとも思わなかった。というよりも句が含まれているということすら意識しなかった。それほどにまで句と湊とは同じようなフォームをしている。それから長い年月が経っても同じ貌のまま、句も湊も静かなままである。

魔球投げれば蝶に囲まれる夕べ P27

初夏に果実のような舌を噛み P27

日本という架空の国の子供かな p28
神の御手毛むくじゃらなり聖人祭 p28
甘栗や食みでるようなキスをして p28
チャールズの鼻は長いよ金木犀 p28
風花やあなたの灰としてのわたし p29

ちゃんと季語が入っているから、これは俳句なのだろうが中身はまるっきり川柳である。そもそもどこかいい意味で「的はずれ」の感じがある。たとえばこの20句（ここには3分の1の7句を引用したが）から「恋愛」をどう想起しろというのだろう。このヘンテコな構図が川柳なんだと僕は思う。確かに「キス」とか「あなたの灰」とか、考えようによっては情熱的な愛の行為を思い浮かべないわけでもない。しかし、「キス」を語るのに「甘栗」か。間抜けている。「あなたの灰」と言われても灰だらけな猫が浮かぶくらいである。並んでいるのは俳句でも、そのとぼけてズレた発想がすでに川柳である。恰好よく「魔球投げ」たのに「困」んで来るのはヒーローインタビューの記者でなく蝶だとか。（僕は最初この句の「蝶」を「蜂」と読み間違えていて、とっても恐ろしい目をしたが、本当のところは「蝶」であった。そうするとほのぼのとした感じや、楽園の印象さえある。）「初夏に果実」の句なんて、爽やかだなと思ったとたんに「舌を嚙」む。「日本という架空の国」の句はシリアスな気もするけれどどこかセカイ系（死語）のアニメさながらの「中2病」の世界だし。「毛むくじゃら」な「神の御手」なんてまっぴらよ。はみ出た栗にキスをするのは、これ如何に。「チャールズ」なんて名前、象には素敵すぎてます。「あなたの灰」は回文っぽいね。でも全然回文にはなっていない！とツッコミどころ満載。すでに「川柳」作家としての方向は最初から定まっていたのだと思うと面白い。



2

句ではなく湊圭史本人と出会ったのは2002年か2003年の頃である。当時の若い書き手たちを集めて「最新鋭詩集研究会」というのを始める時、中核メンバーの一人として彼はそこに来てくれた。それが最初である。そのあと確か2次会へと向かう途中。湊の専門はオーストラリア文学だということだったが、僕はカンガルーとコアラの区別くらいしか分からぬ門外漢。それで「英文学の学会というのはどんな具合なんですか」みたいに極めて

無難な質問のつもりで彼に尋ねたのだった。すると合評会の時は穏やかそうに見えた湊が突然「いやあ、いろいろ問題はありますよ」と強い調子で言い放った。僕には「英語関係の学会って馬鹿ばかりですよ。ほんとに権威主義で嫌になりますよ！」とでも言ったように聞こえたが、まさか初対面の人間にさすがにそこまで言うはずはない。僕の「空耳のつづき」だったのだろう。斜め前に京都タワーが見えていた。湊によると、長く僕は湊のことを語る時に「ハードコア、ハードコア！」と盛んに言っていたらしい。それは彼の、権威に対する憤怒を真近に感じた最初の出会いに起因しているのかもしれないと今になっては思うのである。

「最新鋭詩集研究会」はしばらくして「Lyric Quest」（通称りりQ）という名前に変更されたが、ひところは毎回20人を超える人数でゴった返していた。荒木時彦や山村由紀、南原魚人、関根悠介、岡村知昭、谷口IZZY 慎次、川原寝太郎、のちに湊圭史のハートを鷲掴みにすることになる藤井五月などが夜遅くまで飲んでいて、何かのイベント帰りということで東京の若い詩人たちが乱入するようなことも時折あった。トミヤという堀川塩小路突き当りの焼き鳥屋が定番だった。そこの兄ちゃんが「頼むからもう帰ってくれ」というサインとして、注文してもしないスナック菓子を大量にテーブルに持ってきてくれる3時前まで飲み続ける蛮行を月に1、2回20年近くも続けていたのだった。もっともトミヤは10年近く前に潰れ、湊は新婚になって少しずつそんな馬鹿な飲み方からは足を洗いつつあったが、それでも湊と田中宏輔と荒木時彦らと駅前のサウナに泊まった覚えがある。みんな酔い過ぎて、どうせサウナに泊まるんだからおとなしく寝ればいいものを、狭い洗面所みたいところでいつまでも下らない話をして頭がくらくらした。意地を張って誰一人簡易ベッドに行こうとしないのである。それは湊が結婚してから暫く後のことではないかと思うが、僕の思い違いかもしれない。

そんな奇体な付き合いもあったが、基本的には僕も湊も君子である。だから基本的には水のように淡い付き合いを極めて普通に続けていた。そしてこの先も水が流れるようにずっと続くだろうくらいに思っていた。ところが湊は2019年の春に愛媛は松山の大学に赴任していった。『坊っちゃん』みたいだと思った。それで毎月顔を合わせることもなくなった。淋しくなった。

3

そういうわけでここ暫くは、僕が編集を担当している詩誌「Lyric Jungle」の校正時にメールのやりとりをするくらいだった。が、昨年末に『金曜日の川柳』『はじめまして現代川柳』の2冊を送ってきてくれた。それでまた距離が近くなった気がした。（本というのは凄いいもんである）。ここ2年間の空白を味わうように僕は一挙に貪り読んだ。どちらもアンソロジーだが、前者は一人の作者1句ずつの掲載である。後者『はじめまして現代川柳』については本誌「月刊 新次元46号」に感想を書いたが、それは多くの川柳作

家の作品を集めている上にそれぞれの作者のかんりの数の句が掲載されている。だから書評では湊の作品ばかりに多めに触れることも出来ず少し歯がゆい気持ちになった。それでここにもう少し書いておきたい。

この本は見ての通り、非常に派手はでしいカバーでがちゃがちゃした印象のある本だ。何十人ものクセ者ぞろいが綺羅星のごとく並んでいるのだから、そんなカバーになるのも納得がゆく。湊の作品も、他のヘンな奴らに負けないくらいどこか歪みどこか毒が感じられる。

機関車トーマスを正面から殴る p276

先々週の交通事故者数とぼく p278

湊の川柳はどこか痛い。ひりひりしている。ひりひりしているが、とぼけている。立派なもんだと思う。これでこそ川柳だ。子供たちのHero「トーマス」を「殴る」だなんてなんて酷い！でも面白い。一度殴ってみたい。「交通事故者数」の描かれた交番前の告知板もとても重い気持ちにさせる掲示板である。それが「ぼく」の前にある。心がざわめきながらしんとしている。暗すぎて笑う。

あゝあれが受胎告知の鳥だった p278

朝びきの鶏の頭はどこへ行った p278

丹田をトロンボーンで突つかれる p278

麦の穂が病室にまでのびてゆく p278

「受胎告知」は、聖なる存在にとっては朗報だが、できて欲しくない人にとっては青ざめのバッドニュースであるぞ、「鳥」。「鶏の頭」の句もそうだ。「鶏の頭」だけが走って逃げていった。悲しい光景であるが、可笑しい。「トロンボーンで突つか」ないで！と言いたくなるし、うーんその中ではしかし「麦の穂が病室にまでのびてゆく」はちょっとほのぼのする隙が少しある。ほっとする。箸休めだ。だからといって悪いわけではない。それがないと料理全体が死ぬる。

ラッパより大きな音で舌を噛む p 279

膝下は被災地 胸から上が白鳥 p 279

顔文字のひとつになって流される p 279

「ラッパより」の句のショックは何にも代えられない。舌は噛みたくないものだ、痛っ！という感じがする。「膝下は被災地」の句は社会派だ。「膝下」の上の句はよく分かる。この土地、が被災している。では「胸から上が白鳥」とは？と想像する。すると屋根

の蓋部が外れて羽ばたく白鳥のように見える例の原発の遠景が見えてくる。風刺の極みだ。だが美しいから嫌味がない。否、逆か。美しいからこそ嫌味なのだ。「顔文字」の句は切ない。「流され」てしまうからね。あんなものを使っていると時代と同化してしまう。そんなことは分かっているもやっぱり時代と「ひとつになって」しまっている、作者も読者も「流され」てゆく。時代によって。あるいは自分の欲望の方面に知らず知らず

ドキドキしながら電池を捨てに行く p280

コーヒーの匙に瞼がついてきた p280

ぶよぶよと生き抜く地下の理髪店 p281

消しゴムを窓の外まで取りに行く p281

「電池を捨てに行く」湊（では、ないか。。。話者と言っておこう）は、きっと不法投棄の最中である。電池を森の中に捨てに行っているのだ。処分しにくいものを不法に捨てに行く「ドキドキ」した気分が、いつの間にか一人で歩く心細さに変わる。森でなくて、玄関口から出てすぐ近くにある空き地かもしれない。罪人ゆえの孤独さ。その一人具合がかっこいい。「コーヒーの匙」の句は「コーヒーの匙」に「瞼」が映っているみたいに解釈することもできるが、それではあんまりおもしろくない。「瞼がついてきた」と言ってるんだからそのまま読まなきゃもったいない。つまりは、ホラーだ！「ぶよぶよ」の句のよいところは「地下の理髪店」に目を向けたところ。なるほど、地下に理髪店が存在している！そして「ぶよぶよ」と「生き抜く」いているという事実！なぜ潰れないのか。それは「ぶよぶよ」しているからだよ、と湊が書くと妙に説得力が生まれるのだ。



僕は俳句や川柳の研究者ではないから、それらの批評は正式にはどうなされるべきであるのか詳しくは知ってはいない。しかし俳句も川柳でもちょうど本稿でやっているように何句か並べて少しコメントを記すというやり方をすることが一般である。俳句でも川柳でも批評文の「形」はおんなじである。しかし決定的に違うのは俳句の場合、どうしても幾方向かに分かれるだろう解釈のその可能性をある一定程度紹介することが必須となる。それは解釈がいろいろにできるというのが俳句の面白みの大きな特徴だからだろう。したが

って、どれだけ鋭い解釈を披露するかというのが、俳句批評者の腕の見せ所となる。しかし川柳の場合はやや違う気がする。川柳の場合、笑ってなんぼの世界である。笑って終わりにしても構わないくらいだ。笑いに深いも浅いもそんなしんきくさいことはない。ギャグセンスだけの世界だ。もっともそれについて何かを書く以上、解釈ではなく「どこが面白かったのか」を書くという形にせざるを得ない。「解釈の可能性を披露する」のが俳句批評だとすれば、「可笑しさを確認する」のが川柳批評だろう。ほんとうのところはどれが面白いと思ったか並べるだけでもいいと思うのだが、何か書きたくなってしまう。その句について何か書かせる力を持つのがすぐれた川柳の証拠なのだろう。もっともこれは川柳に限ったことではないが。

4

最近湊が今度は個人川柳作品集を刊行した。僕はだまかに言えば以下のようなメールを直ぐに出した。

『そら耳のつづきを』（湊圭伍）を頂戴につき感謝。『はじめまして現代川柳』掲載の句々は少し棘のあるものもあったが、今度の句集のものは装丁のイメージも相まって、沈思黙考という印象。

すると湊から「確かに本の装丁のイメージというのは大切ですね」というような返信が来た。「平居さん、装丁に騙されてますね！」というような意味なのだろう。確かに薄いエメラルドカラーの静かなカバーに青みのあるグレイの大きな帯に抑えた橙色の文字。



中身も抑えられていて、「殴る」とか「突つく」とか「噛む」みたいな直接的な攻撃は少ない。けれども読み進めてゆくと、やっぱり湊らしい冷めた目線は健在である。以下数句ごとにコメントする。◎を付したのが特におもしろいと思った句。（前節2でも◎をつければよかったとおもったけれど、まあ、それは本誌新次元46号に書いたものが◎だったということにしておく。）

◎柏崎刈羽原発第一号機の塗り絵 p13

愛し合おうよこの検問を抜けてなお p13

まつげに月が刺さってますよ母さん p49

「ヒント」の句は、現代詩の朗読会を連想させる。現代詩は「オチ」がないものあり、誰かが勇気を振り絞って拍手してくれてはじめて「ああ終わりなんだ」と気付く。「柏崎刈羽原発第一号機の塗り絵」は社会派だ。社会派だけれど気持ちいい。「塗り絵」になんかしちゃうことで、ものすごく風刺が効いている。すっきりと笑える。「愛し合おうよ」の句はスライドの美学。愛とは、いかなる場合でも何やかやと他人や恋人や自分自身の中にある「縛り」を掻いぐって生き延びなければいけない運命を背負わされている。それを「検問」と表現することで個人的なものに過ぎない「愛」が見事に社会化される。「まつげに月」は、目に刺さるような巨大なつけまつげをしている女子大生などを時折見かけるけれども、「お母さん、あなたもですか!」と言いそうになる。

三月の電話に薄い膜がはる p49

王様はいつもコスプレいさぎよい p51

押すとヒンコンと音の出るチャイム p51

◎英和大辞典を重石にして潰れたきゅうりを齧りながら、
国家テロの結果を流していく春は忙しい。 p56

「三月の電話」の句は「電話」に「薄い膜がはる」という言葉に戸惑う。戸惑うけれども、そういえば「三月」は春霞の季節である。「電話」にだって「膜がは」ってもいいだろうという気分させられてしまう。「王様はいつも」の句は「コスプレ」という皮肉な言葉を「いさぎよい」でフォローする。シリアスになり切らないところが川柳だなあ!

「押すとヒンコン」の句は、小学生が言いそうなギャグ。そうか、湊に限らず川柳とは小学生の男の子の放つ日々の下らないギャグに限りなく近いのだと今気づく。「英和大辞典」の句は、文字数が超超過気味。これは「字余り」とか呼ぶの? 暴走川柳、掟破りである。ただ、こういう例は過去にもあるようで、例の『はじめまして現代川柳』にも掲載されている。例えば墨作二郎の以下のような句。

埋没される有刺鉄線の呻吟のところどころ。

秩序の上を飛んでゐる虫のきらめく滴化 P54

これも社会派で都市生活の中で自由に羽ばたく難しさを息苦しく描いている。言葉がごつごつしている。川柳の枠の中に留まっていられない苛立ちで満ちている。字余りなどの小技で突破しようのない焦燥感のようなものまで感じる。掟破りをするものの意義がよく伝

わってくる。湊の句の場合、上のものと比してもう少しこなれた感じがある。帯文によると湊は「川柳の伝統を批判的に受け継ぐ現代川柳作家」だそうだが、なるほど、**墨**の朴訥さを丁寧になだめ、あろうことか「**国家テロの結果を流していく**」のである。「**流していく**」とは右から左に聞き流す、みたいな意味だから「**国家テロの結果**」に左右されないけ・せら・せらである。「**春は忙しい。**」からそれでいいのだと湊は言う。墨作の生真面目さを一段上から笑っている感じがする。

- 避妊具が勝手にしゃべる本能寺 p 58
- ダイソーの入り口にある島根県 p59
- 妻を追う風船ふたつ貌がある p 63
- 珍事から猫の実だけをもち帰る p70
- ◎二年前はここにサラダがありました p74

「**避妊具が**」の句は「**本能**」と掛けて妖しい場面を思わせる。ひくひくと痙攣する魔羅に「おい、まだまだヘイキだぜ」などと「**避妊具が**」語り掛ける。絶倫川柳である。「**ダイソーの入り口**」の句は面白い。「**ダイソー**」創業の地は広島らしいので「**島根県**」とどこかで接しているんだろう。100円ショップでいつもごった返している「**ダイソー**」が人っ子一人いない島根県と隣接している。皮肉じゃないか。「**妻を追う**」の句はお母さんの後を追いかけてゆく子供たちの、ふわふわ感を想像した。これはほのぼのとする句だ。「**珍事から**」は、よく分からない。「**珍事**」も「**猫の実**」もよく分からない。しかし分からないかといって決して嫌な気持ちがない。「そうなんですな〜」と受け流したい。受け流すけれどもどこか耳の片隅に「あんなこと言ってたなあ」と残っているような言葉である。「**二年前はここに**」の句は素晴らしい。これの笑いの原理は簡単なのだが、「**サラダ**」だけに新鮮な気がする。『ドラえもん』のび太が、白い犬を目印に地図を書いて笑われるみたいなエピソードを想起する。或いは、木の幹に大きなヤモリがいたのを、翌日にまだいるのだと信じて母親の手を引っ張って見せに行った自分の幼時を思い出す。また、オハラが目の前で分厚い板を素手で割った時眉ひとつ動かさず「敵はじっとしてはいない」と言い放ったブルースリーの表情を思う。つまり世界はゆっくりとではあるが動いていて、同じ事柄は二度と起こることはない。しかしそんな小理屈を言っても面白くもなるともないので「**サラダ**」の川柳が世の中には必要になってくるわけだ。

- 生き延びるためにキノコをかぶる人 p81
- ◎勇気が湧いてくる不味いラーメン屋 p 86
- 宅配のピザに手をだす十二使徒 p86
- ◎火葬場の火からウナギの話題へと p 91
- あとがきで架空の町が作られる p 95

「**生き延びる**」の句は社会派に取れる。きのこ雲から降ってくる放射能を、巨大なキノコの傘を被って生き延びるのだ。ところが、巨大なキノコはどうして発生したかと言え、放射能汚染で巨大化したのである…という時系列が混乱する物語を想像する。

「**不味いラーメン屋**」句は、いい。不味いものを食べた時の人間の反応ほど力のこもった物はない。大学時代、悪友とラーメンを食らった時そいつが「なんやこのラーメン、不味い。ドブの味や！」と言ったのを覚えている。後年、酒を飲んだ後締めラーメン屋で寸分の狂いもなく同じ言葉を彼は発した。20年くらいは優に経っていた。また、京都駅近くにある黒いスープで有名な汚いラーメン屋にわざわざ学生を連れて行ってやったことがある。その時、店のおやじが横にいるのに「先生、このラーメン、不味い！」と大声でそいつは言いやがった。僕はラーメンの汁よりも黒くなってそのコを睨みつけた。不味いラーメンを巡る言葉には確かに独特の毒気を呼ぶ。「**宅配のピザ**」の句は、「あは〜ん、そうですか〜」くらいの印象だが「**十二使徒**」という言葉で突然世界が気高くなる。ぐっと締まるというのはこういうことだろう。「**火葬場の**」の句は暗い印象だが、確かに火葬場で白く散らばっている灰を見つめていると、「**ウナギ**」の焼き具合などが気になってくる。そういえば珍味にウナギの骨だけを集めた「うなボーン」というのがあった。

◎もうデマと妻の区別が付きません p101

何となく明るいほうへハンドルを p102

待合室で椰子の実ひとつ托される p102

朝のカーテンが揺れている小さな声で p105

「**もうデマと**」の句は愛の句だ。「**デマ**」とは根拠なく物事を信じることによって生じる誤謬のことである。湊は「**妻**」の言葉を妄信するのだろう。愛の句である。素晴らしいと思う。「**何となく**」の句は不思議だ。作品外のことだがそういえば僕は湊が運転しているところを見た事がない。何故か湊と自動車をセットで想像したことがなかった。しかし考えてみれば、広いオーストラリアの砂漠を横断するのに自動車は必須だろう。もしかしたら湊は、煽り運転を仕掛けてきた車を逆に光速で突き放し「何だったんだ今のは!？」と驚かせるような強烈なスピード狂かもしれないとふと思った。そして夜明けのハイウェイを、あてどもなく走り続けるのである。男だね!「**待合室で椰子の実**」ははらはらする句だ。「**待合**」は芸者遊びの店のことで、男は「**椰子の実**」を芸者からこれ、面倒みてねと「**托される**」わけである。椰子の実を割ってみるとそこに小さな赤ん坊がすやすやと眠っているという訳である。男はいろんなところで椰子を貰っているのかもしれない。「**朝のカーテン**」の句はいろんな場面が浮かんでくる。彼女の声で「**揺れている**」と考えるとセクシーな句だ。「**小さな声**」が子供の声だったとすると、日曜日なんだからゆっくり寝か

せてっ！とカーテンにぐるぐる巻きになって朝から遊んでいる子供たちの元気な声が聞こえてくる。

5

実はある朝に本稿（の原型）をようやく書きあげ、仕事から戻ってパソコンを見た。すると全部消えてしまっているのだった。上書き保存がうまくいっていなかったらしい。「もとに戻す」を押したり引いたりしても結局、今も旧稿は迷宮を彷徨ったままである。もう陽の当るところに出てくることはないだろう。だから初めからもう一度書いた。初めに書いたことと全然違うことになったかもしれない。しかし、2度目に書きながら思った。不思議に全然、書き直すことがメンドクサクないのだ。なるほど、これは湊の句の力だと思った。力、というか力の抜き方である。優れた現代川柳を読んだりそれについて書いたりすることは現代人にとっての大いなる慰釋に他ならないのだと今回初めて分かった気がした。